

真木大堂 仏教の至宝がある場所

馬城山伝乗寺は、数百年前の絶頂期に半島全体で最大の寺院の 1 つでした。修行が行われる中心地でもあります。（伝説を信じるのであれば、富貴寺の木材を引いていた牛が疲れ果て、これ以上先に荷物を運搬することを拒否した場所です）。すべてが平安時代(794 年から 1185 年)に作成された国宝であり、今日、日本における木造の仏像彫刻の最高傑作を数体安置していることから、最も重要な寺院となっています。同年代の構造をみても、この寺院の存在は、密教の殿堂において高い位置に相応しいほど力強く強烈なものです。不思議なオーラがありますが、仏像はどこからいつ来たのか明確な記録がありません。また 1 つ歴史的でスピリチュアルな謎が現れて、この国東半島の山々を覆っているようです。

阿弥陀如来

宝物殿の目玉は、阿弥陀如来坐像です。大部分が複数の日本糸杉から作られており、4 体の甲冑をまとった四天王に守られています。穏やかな瞑想ポーズと落ち着いた表情をしており、大きさは 216 センチメートルあります。4 体の守護者のポーズとは対照的であるのが明確にわかります。阿弥陀如来の肌色は黒っぽく見えますが、金色の木の葉が色褪せて、下の基礎部の漆コートが見えているのです。顔の形は、大半の神様の描写よりも丸みが少なく、手の位置は、最も歓迎している位置に配置されています。

不動明王

阿弥陀如来の右方向には、不動明王立像があります。守護の神様であり、両脇に脇侍が 2 体控えています。日本における最大の木彫仏であり、大きさは 250 センチメートルあります。誇張した外見は、邪気を追い払うためだけでなく、人々に対して救済を受理するよう脅すためのものです。従来の藍色が袈裟にわずかに残っているのを手掛かりとして、色褪せた表面上にも藍色の個所が見えます。右目

ははっきりと天を見つめており、左目は地を見下ろしています。背後には、圧巻の演出があります。神聖な燃える不死鳥が周囲を飛んでおり、おそらく江戸時代後期(1603年から1867年)に追加されたものでしょう。右手に持つ剣は、煩惱を断ち切るためのものと伝えられています。

大威徳明王

阿弥陀如来坐像の左方向には、水牛に乗った木彫大威徳明王像が安置されています。反対側の像と同じく、密教における5大明王の1人です。梵名ヤマーンタカ、または「死を断ち切る者」の意味です。戦士の神様として人気がある理由はわかりやすいです。高さ241センチメートルのこの像は日本で最大の木像不動です。頭部と水牛の体部は生き生きとしており、王様の身体的特徴である後ろに見える6個の頭、6本の腕、6本の足をさらに誇張しています。(水牛は富貴寺の櫃の木の伝説を援護するものとして解釈されていますが、中国やインドでもこれより前の時代でも見られるために、その関係については懐疑的です)。